

低炭素社会戦略センターシンポジウム「低炭素技術を取り込んだ街づくり」

日時 平成 28 年 12 月 13 日（火）13:30～17:00

場所 伊藤謝恩ホール

主催者挨拶

濱口 道成（JST 理事長）

今日は師走の慌ただしい時期ですが、この「低炭素技術を取り込んだ街づくり」シンポジウムにご参集いただき、誠にありがとうございます。高い所から大変恐縮ですが、一言ご挨拶させていただきます。

小宮山センター長のお話にもありましたが、昨年末、フランスのパリで開催された「COP21」において、今後の地球温暖化対策が国際的に検討され、2020年以降の新たな枠組み、いわゆるパリ協定が締結されました。従来と大きく違うところは、2大排出国のアメリカと中国が初めて合意した点で、画期的な転換点になると思います。一方で、トランプ大統領が選ばれ、現在の世界政治はかなり複雑に展開し始めていると実感しています。

低炭素という作業は、1日、2日、1年というような短いタームで考えるものではなく、10年、20年、2030年を、さらに2050年を目標にして、息の長い作業を進めていかなければいけないものだと思います。人類共通の課題に向けてしっかり動いていかなければいけません。

また、昨年9月に、国連でSDGs（持続可能な開発目標）17項目が制定されました。17項目はなかなか多様で、従来の南北問題や先進国と開発途上国の間の対立を超えて、人類社会が持続していくための共通のものを設定したことは、非常に新しい試みだと思います。貧困や、男女平等、教育の問題、食糧の問題から始まり、基本的な生存に関わる問題から、環境や資源の保全といった幅広い問題に関してもきちんとした目標を立て、169の課題を設定しています。これも2030年がゴールとされているので、この考えをきちんと定着させて前へ進んでいかなければいけないと思っています。

このSDGsに関しては、JSTでもプロジェクトチームをつくり、内部で一つ一つの問題を検討するとともに、国際会議にも出席します。実は、今月初めには、ニューヨークアカデミーが主催した会議がありましたが、そこにも何人かが参加して世界の動きをつかんでいます。

大きなポイントの一つは、SDGsは単に人類の理想を掲げただけではなく、企業の社会活動、経済活動として採り上げるべき問題としたことで、これは非常に新鮮です。つまり、私たちの日常活動、社会の一般の中でSDGsをどう実践していくかということで、非常に新しい試みになっていると思います。アメリカの場合は、多くの企業が既にこの課題に関して設定をし、対策を考え、参加をし始めています。私は、このSDGsを単なる掛け声ではなく、私どもの社会活動として定着させ、展開できるように、議論しながら進めたいと思っています。

この低炭素はSDGsにとっても一番根底的な問題の一つです。人類社会が持続できるかどうかという課題に向けて、引き続きしっかりと研究を進めていきたいと思っています。今日は長時間にわたりますが、活発な議論をしていただいて、人類社会の未来について考えたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

以上